

「私とジェンダー」をテーマに
毎回様々な切り口でコラムを
掲載しています。

私とジェンダー

いだ・ひろゆき

1958年生まれ。立命館大学非常勤講師。NPO法人SEAN監事。主な著書「スピリチュアル・シングル宣言」(明石書店)「はじめて学ぶジェンダー論」(大月書店)「続・はじめて学ぶジェンダー論」(大月書店)「これからのライフスタイル」(仕事の絵本シリーズ⑤大月書店)

イダ ヒロユキ

ジェンダーは制約だ

あさのあつこ『バッテリー』は、子ども(中学生)だからということ、大人が上からナメた視線で関わってくることに反発する少年の話だ。強いものに媚びて、〇〇させてもらうという感覚ではなく、自分でしたいこと、すべきことをしていく、というスタンスだ。

僕にとつてのジェンダーに囚われない自由な生き方とはそういうものだ。人生は短く、くだらないことをやっている暇はない。社会や世間や強いものが「こうしなさい」というようなものに負けてたまるかと思う。そういうものに負けそうになっている人が好きだ。応援したいと思う。だからフェミニズムに共感した。ジェンダーは制約だ。制約は「自分で作っている」という面がある。つまり突破できるのに、できないと思ひ込み、あきらめ、動かない。それどころか、他者にもあきらめなさいよという。他者が自由なのがうらやましい。だから足を引っ張る。そんなことでもいいのか。

ジェンダーフリー的に自由に生きるとは？

じゃあ、自分がジェンダーフリー的に自由に生きるとは？

男性は特に働きすぎが多い。だから働きすぎてくたくたになってバーンアウトしないこと。つまらないことで人生の時間を消耗しないこと。家事を他者に押し付けず適度に自分ですること。親しい人との豊かな時間をちゃんと持つこと。自分のしたいことをすること。一人での時間を持つこと。自分の使命や楽しみを尊重すること。自分の精神的安定の活動、自分の身体によい活動、好きな人との語らいの時間、といったカネにはならない時間・活動(アソビドワーク、スローな時間)を大事にすること。これは、自分がめざしている「豊かさ」を先ず自分から実践して示すということでもある。他者に対して、ジェンダーといった規範や自分の意見を押し付けず、その人らしさを尊重すること。男女で不必要な差異をつけない。恋人とのあいだでも「DV的な支配関係」にならないように、注意してい

く。知らぬ間にえらそうになつていないか、干渉や依存になつていないかに注意する。多数派の常識を無思慮に言葉にして、知らぬ間にジェンダーを再生産して、誰かを傷つけるようなことをやめる。

例えば、相手の話をきえぎつて急いで自分の意見を押し付けるのではなく、相手の感情を聞き、相手との中で対等公平な関係をつくり、傾聴するようになることが、民主主義という点でも、暴力的な男性性の変革という意味でも、重要である。

自分に対して非暴力的になる

特に男性である僕の場合、自分の権力性を見直すことが大事なジェンダー問題だった。「権力や国家や自民党や右翼や資本」と戦うというようなことを言っている、その人の姿勢自体が、「敵」と同じく「攻撃的・暴力的」でいいのかという問題。私たちがめざすのは、そうした「強いものが勝つ」という暴力的な秩序・雰囲気はなくして、弱きもの、普通の人々が幸せに生きられるようなピ